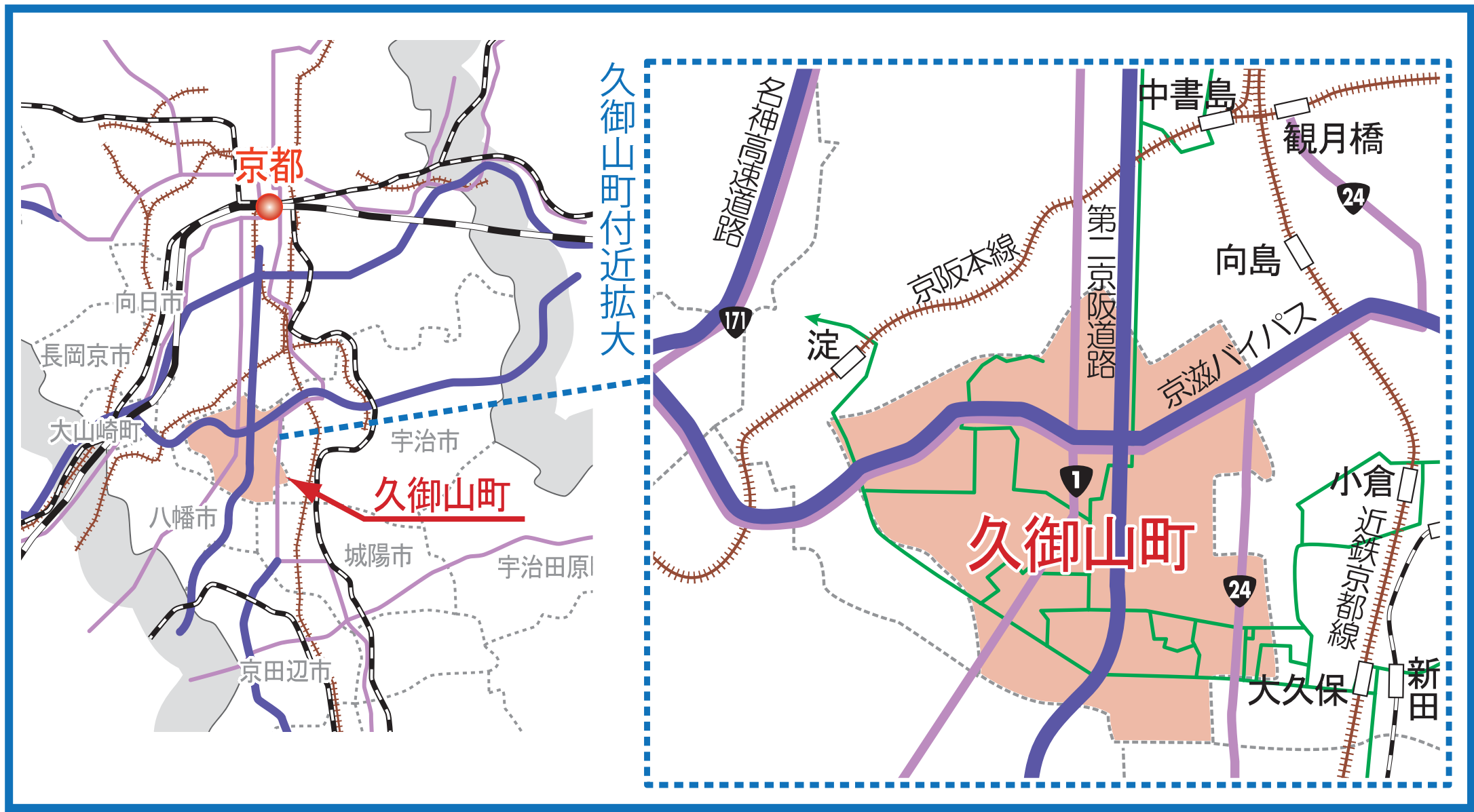


小学校交通環境学習の成果と継続のポイント

～京都府久御山町の事例から～



堀 雅清（京都府建設交通部交通政策課）／豊田 清志（久御山町事業建設部都市計画課）
松村 暢彦（大阪大学大学院工学研究科）／東 徹（社団法人 システム科学研究所）
【発表】貞松 純子（株式会社 地域未来研究所）

久御山町の概要

- 町内に鉄道駅がなく、公共交通機関はバスのみに依存
- 近隣市の最寄り駅までは路線バスによりアクセスが確保
- 平成 16 年度からコミュニティバス「のってこバス」が運行を開始

取組の目的

児童に地域の公共交通であるバスの走る意味や、バスが環境や地域にもたらす影響を考えさせることで、自分たちのくらしや将来のまちづくりを考える機会を提供し、公共交通の利用促進を図る

小学校を対象とした理由

児童を通じてバスのある暮らしの良さが家庭へ伝わることで、保護者の交通行動変容を期待
バスに乗ったことがない児童が乗車体験をきっかけとし、将来の利用者につながる可能性
「暮らしの豊かさ」や「まちのあり方」に関わるバスは、他教科との親和性が高く小学校で受け入れられやすい

平成 16 年度

- 『京都府交通需要マネジメント施策基本計画』策定

平成 17 年度の取組

- 『環境的に持続可能な交通（E S T）モデル事業』の一環として学校との連携による施策を開始
- 佐山小学校5年生の総合学習の時間（計 10 時間）で乗車体験、町職員の出前授業、松村准教授による出前授業「交通すごろく」、「のってこバスPR大作戦」のプレゼンテーションなどを実施
- 乗車時のサポートカーでの併走、町有バスの手配などの支援体制
- 児童の利用促進策の提案を受け、バス停への花壇の設置や広報紙への取組結果の掲載などいくつかの実現

課題

他の授業科目へのしわ寄せなどによる教職員の負担の軽減
学年的な広がり推進するためのプログラムの開発

平成 18 年度の取組

- 前年度の成果を踏まえ、町内の全小学校（3校）に意向打診し、佐山小、御牧小は5年生、東角小は2年生（生活科）で乗車体験などの授業を開始
- 乗車体験時のサポート等は教育委員会、出前授業は都市計画課で実施するなど、継続に向けた役割分担が確立

課題

継続性や展開性を重視したプログラムの開発
バス利用促進策との連携による相乗効果の期待

平成 19 年度～ 継続中

- 小学校教諭自らが対象児童や授業数に応じて柔軟に企画・展開し、行政や専門家は要望をサポート
- 「バス・エコファミリー」を実施し、ちらしとお出かけマップを全児童に配布することで、家族でのバス利用や家庭での話し合いの機会を提供

課題

更なる普及を目指し、複数学年に対応したプログラムの開発



交通環境学習の成果

- 地球環境問題や渋滞などの交通問題だけでなく、自分たちのまちを知り地域を愛する心の育成につながる
- 乗車体験は公共空間でのマナーや他人への思いやりを学ぶ上でも教材としての魅力が高い
- バス・エコファミリーとの連携により、公共交通の利用促進や家庭への広がりにも有効

取組のポイント

1. ファーストコンタクト時の主旨説明

学校はあくまで教育の場であり、児童を一番知っている教師の直感を重視し、自治体の意向を押しつけないことが大切。どんな支援ができるのか、どんな事例があるのかを具体的に伝える。しかし、授業で伝えたいことは主張する。

2. アプローチ時期は前年度 2 月までに

次年度の授業計画の枠組みが決まる 2 月頃に、学校長会などの機会を通じアプローチする。

3. 関係主体の役割分担の明確化と、柔軟なサポート体制の確立

小学校（交通・環境学習の採用と実施）、教育委員会（町と小学校との調整、乗車体験のサポート）、久御山町（小学校との取組調整、コミュニティバスの出前授業の実施、乗車体験の支援）、大阪大学（小学校・行政への取組アドバイス、交通・環境学習出前授業の実施）、京都府（交通・環境学習推進のための総合調整）、地域未来研究所（交通・環境学習推進のためのサポート）